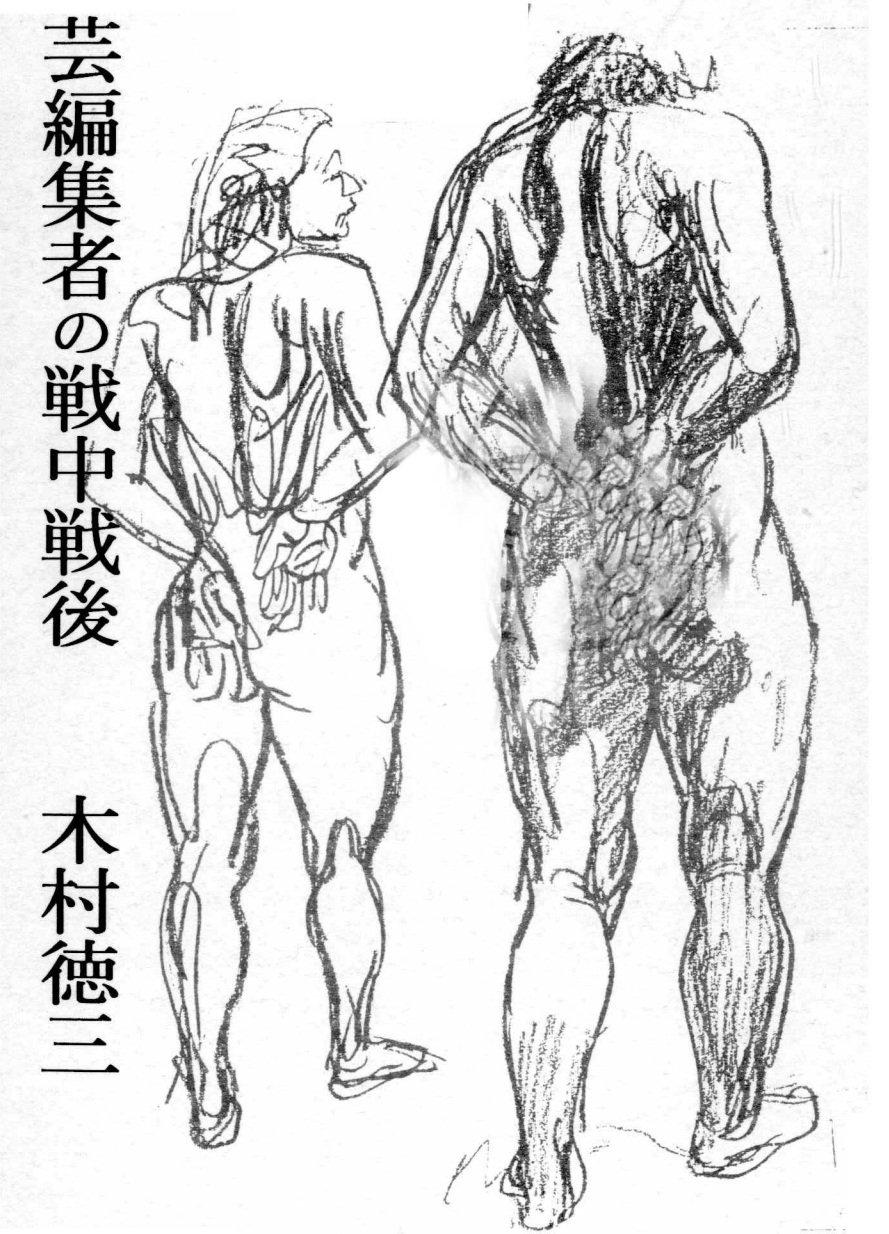
文芸編集者の戦中戦後

木村徳三

大空社

芸編集者の戦中戦後

木村徳三



大空社

著者略歴

木村徳三（きむら・とくぞう）
1911（明治44年）、京都生まれ。旧三高、東京大学文学部仏文科卒業。改造社、養徳社を経て鎌倉文庫『人間』編集長。その後日本教育テレビ（現テレビ朝日）、博報堂嘱託、三笠書房副社長、（株）アサ・フォーチュネート代表などを歴任。

文芸編集者の戦中戦後

定価二、八〇〇円
（本体二、七一八円）

一九九五年七月二一日 発行

著者 木村徳三
発行者 相川仁童
発行所 株式会社 大空社
〒115 東京都北区赤羽二—三六—一二
電話〇三（三九〇二）二七三一（代）
振替〇〇一六〇—九—一四〇八八二
印刷製本 株式会社 フリオール

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします
ISBN4-7568-0007-6 C0095 P2800E

文芸編集者の戦中戦後

目次

I　作家白描……3

島崎藤村　3
正宗白鳥　6
高村光太郎　13
幸田露伴　17
永井荷風　19
谷崎潤一郎　24
志賀直哉　33
菊池　寛　38
宇野浩二　42
横光利一　56
川端康成　1　65
川端康成　2　74
武田麟太郎　81

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高見　順　88
林　房雄　99
宇野千代　104
林芙美子　109
宮本百合子　119
佐多稲子　122
吉屋信子　126
太宰　治　129
織田作之助　139
三島由紀夫　143

II　『文藝』時代……169

『文藝』以前　171
二人の先輩　178
編集プラン　184

作家訪問　188
出張校正　201
改造社解散前後　210
Ⅲ　『人間』時代……227
『人間』創刊　229
鎌倉文庫　白木屋時代　247
鎌倉文庫　茅場町時代　268
目黒書店　281
初版あとがき　303
再版あとがき　307
木村徳三さんのこと　近藤信行　309

本扉　画　須田國太郎

I

作家白描

島崎藤村

大学を卒業した翌年（昭和十二年）の春、改造社に入社した私は、はじめ出版部に配属された。そして入社の翌日すぐさま文庫本を二冊受け持たされた。忘れもしない、ショーロホフの「静かなドン」（上田進訳）と島崎藤村の「藤村随筆」だった。

戦前は、文庫といえば即岩波文庫、岩波文庫は文庫本の代名詞といってよかった。その目録に上されている著作はすべて古今東西の古典的名著と目されていて、岩波文庫を全巻そろえ持つことが夢であり理想だと大真面目で語る読書青年すらいた。ある男が紀伊国屋の売店勤めの娘と結婚したところが、その娘は岩波文庫を全部持っていて、男は予期せぬダブル幸福にいたく感激した、という噂が伝わって私たちの羨望の的になったことがあった。しかもその噂に尾鰭がついて、実はその娘、文庫本が発刊されるごとに一部ずつくすねてためこんだんだそうな、という。私たちは失笑するとともに、いっときその噂話を愉しんだものだった。

そんな岩波文庫の独走に対抗して、改造社が昭和初期に改造文庫の刊行を始めた。野暮ったいカーキ色の布張りの改造文庫本を覚えているひとは現在もう少ないだろうが、この文庫の編集担当が改造社の出版部では新入社員に課せられる最初の役割だった。もちろん、編集担当といっても、私たちのような学生あがりに原稿集めや編集、割付けなどという仕事ができるはずもない。もっぱら校正であ

る。それさえも全く未経験の私は、先輩たちに教わりながら原稿とゲラ刷りとの引き合わせに懸命な毎日を過ごしていた。

ある日、部長（大島治清氏）から、「藤村随筆」の序文ができたそうだから、島崎家にうかがっていただいてくるようにと命ぜられた。

島崎藤村氏の住居は麹町六番町にあった。小ぎれいではあるがとても文豪の邸宅とは思えない、ささやかな町家だった。夫人に来意を告げ玄関口で待っていると、やがて音もなく、眼鏡をかけた和服の老人がすっと現われて、私の前に端然と座ると、「島崎です」と軽く会釈した。

かつては「小諸なる古城のほとり……」とうたい、「破戒」を書き、そして数年前に大作「夜明け前」を完成した文学史的大作家が、まさか出版社の走り使いの前に顔を出されるなどとはゆめにも考えていなかった私は、口もきけずに棒立ちでいる他なかった。

藤村氏はすでにかなりの年配だったろう、頭は薄く白かったが、目鼻立ちの大ぶりな長い顔をまっすぐに向けた正座姿は、一種近寄りがたいストイシズムを感じさせた。室内作業の職人などが着けているような大きな前垂れが膝を被っていたが、その幅広の縞木綿がたっつけ袴とも見えた。

藤村氏は手にした封筒をさし出して、

「用がすみましたら、必ず返却してください」

と物静かな声で言った。

それからあとのことは何ひとつ覚えていない。きっと無我夢中だったのであろう。記憶に蘇ってくるのは、島崎藤村氏に直接会った興奮からほとんど駆け足で、四谷見付に向かって脇目もふらず急ぎ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

帰ったことだけである。

その後の十数年間にわたる編集者生活で私は有名無名数多くの文学者に接したが、その最初のひとがこの島崎藤村氏であった。そしてそれは、文豪と称されるひとを目のあたりにし、直接口をきいた、生れて初めての経験でもあった。

正宗白鳥

正宗白鳥氏の戦前の、空爆で焼かれる前の邸宅は目蒲線の洗足池の近くにあった。もとドイツ人かスイス人かの住居だったそうだが、低い木の門から両側に樹木のしげる小道をすこし上って、広い車寄せのある立派な洋館であった。

初めて訪問した私は玄関のベルを押して長い間待った。と不意に扉があいて、小柄の貧相な爺さんが無愛想な顔つきで立っていた。それが自然主義文学の大家、「何處へ」や「入江のほとり」の作家であった。その頃の年配にはめずらしく洋服が普段着のようだった。名前を告げると、老人らしくない張りのある高い声で、

「入りたまえ」

そこでおずおずと入ろうとすると、

「靴を脱ぎたまえ」

外人の建てた家だから靴のままでいいのだろうが、白鳥氏自身スリッパを履いておらず靴下はだしである。

天井の高いサロン風の広い洋間は、窓が閉ざされているので仄暗く、家具を運び去ったあとの空家のようにがらんとしていた。部屋の片側が一段高くなっていて、覆いのかかったピアノがあった。

靴を両手にさげた不細工な恰好のまま私は畏まった声で執筆依頼の来意をのべた。
「僕は『文藝』なんてちっぽけな雑誌には書かんよ。『改造』なら書くがね。寄らば大樹の蔭というからな」
取り付く島のない返事が吐き捨てるような口調で返ってきた。私は呆気にとられて、突っ立っていると
「靴をドアの脇に置いて」
と再び命じ、先に立ってサロンの奥の、庭に面したサンルームに招じ入れてくれた。
食卓のような白いテーブルの端っこの椅子に腰かけたものの、動転している私は話の継ぎ穂もみつからず、気づまりに窒息しそうになっていると、白鳥氏は渋皮色の無表情な顔でそっぽを向いているだけである。
やがてコーヒーが運ばれてきた。
「このコーヒーはいいコーヒーなんだ。飲みたまえ」
たしかにうまいコーヒーだった。コーヒーの味わい方にうとい私にもそれはわかり、はじめて普通の声が出た。
「香りがいいですね」
「ふん、飲んだら帰るんだな。用事は他にないんだろ」
およそ湿りっ気のないあしらいに、私はほうほうのていで退散した。
それから一週間ほどして正宗氏から編集部へ私宛に葉書が届いた。走り書きの文面には、つまらぬ

原稿だが送る、とだけ書かれてあった。思いがけない報らせに私が飛び上がって喜んだのは言うまでもない。なんていいじいさんなんだろ……そんな失敬な言葉が思わず出た。そして、この世の中に何の面白いことがあるものかと言わんばかりの顔つきや、木で鼻をくくったようなしゃべり方さえが、なんとも好ましく蘇ってきた。白鳥文学の愛読者ではなかった私が、以来正宗さんのファンになったのだった。

正宗白鳥氏は風采のあがらぬ小男であった。身なりに関して無頓着というか、合理主義的無神経というか、とにかく戦後はじめて鎌倉文庫を訪ねてこられた（『人間』創刊号の小説「〝新〟に惹かれて」の原稿をわざわざ届けるためだった）ときの印象が、私にはいつまでも忘れられない。

国民服型の上着に、派手なチェック柄のニッカーボッカー（現在ではドタバタコメディなどで戯画化された映画監督のいでたちでしかお目にかかることのない、昔のゴルフ用半ズボン）、膝元まである長靴下に兵隊靴、中折帽をかぶってリュックサックを背負い、ステッキをついたいでたちは、珍妙というよりなかった。もちろん終戦直後の当時は、国民服にゲートル姿から解放されたばかりで、誰もがろくな服装をしていない。しかしそれにしても、そんな恰好の小男の正宗さんがトコトコと編集室に入ってきたとき、室内が一瞬しーんとし、たちまち皆が吹きだしそうになって、それを我慢するのに苦労した。贅沢好みの正宗さんのことで、身なりの品のそれぞれは多分舶来の高級品に違いないのだが、その組み合わせと正宗さんの風貌との関係の妙が極度に発揮されたというべきか、人目をそばだたせるものであることは確かだった。

そんな私たちの視線を意にも留めず正宗さんはすこぶる元気で、持ち前の老人ばなれした甲高い声で話しかけた。

「これから宿を探さなけりゃならんが、君、本郷だったろう、あしこあたりの下宿屋はあいとらんかね」

数日前宇野浩二氏が徳田一穂氏（秋声氏の長男）の夫人の世話で森川町の双葉旅館に部屋がみつかったことを私が伝えると、ふん、と鼻を鳴らし、「行ってみるか」とリュックサックを背負い直して、

「久米君や川端君は、毎日出て来ているのかね。ま、よろしく」

と、威勢よく編集室を出ていった。

それから正宗さんは双葉旅館にしばらく滞在した後も、軽井沢の別荘と東京とを往復しながら、東京の止宿先を転々とする期間が続いた。

その頃（昭和二十三年）の正宗さんの手紙が残っているので、書き写しておこう。乱暴な鉛筆書きである。

木村様　　十月十一日　　正宗白鳥

重光氏にちょっと貴兄に伝言をお頼みしたら、何か言ひやうが悪かつたため御諒解がなかつたらしいとの事、

小生は、長篇は二つ三つ書くつもりで着手はしても、どれも完結はせず、ついては貴社のは春の

別冊にしたいと思つただけで、これはたび〳〵申上げし如く、小生のは連載に適せずとの遠慮に候、しかし、重光氏よりの手紙によると、一月より連さいの当てになされ居る由、それなら努力してそのつもりで寄稿いたすべし、

まだお手紙は届きませんが、時日切迫急を要する故、右一応お知らせ申べし、

一回（五十枚）にて五六ケ月つづく

今月二十日過に上京持参（百枚）のつもり（出来たら）

題は（人間嫌ひ）

終戦後今日までの我生涯を小説化したもの。

これは取つときの材料にて、も少し考へたきところ、機会を捉へたつもりです

委細拝眉の上

（筆者註――文中に重光氏とあるのは雑誌『風雪』の編集者でなかったか？）

この手紙の中に記された「人間嫌い」は、『人間』に昭和二十四年一月号から六月号まで連載した長篇小説だったが、その年の暮れだったと思う、正宗さんは江戸川アパートに止宿していて、私はその部屋を訪ねたことがあった。

すでに鎌倉文庫の経営が行き詰まって、『人間』が目黒書店に譲渡された直後で、その経緯を私は正宗さんに告げに行ったのである。

私はそれほどたびたび正宗さんを訪ねていたわけでない。時たまうかがっても短い時間で用件をす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com